

[要旨]

「キューバ革命の緑化」とマリノフスキーの子供たち ——持続可能エコロジー農業の実験から——

大杉 高司

本稿の目的は、近代人類学の父ブラニスラウ・マリノフスキーの「文脈化革命」と、キューバ革命の現代の担い手が試みる「革命の緑化」とを比較することで、双方の文脈作成の特徴を捉えようとするところにある。マリノフスキーは、研究対象となる人々を「彼ら」が置かれた文脈に据えることで新たな学問活動の文脈を作りあげるといふ、二重の文脈化によって人類学に革命を起こした。この「文脈化革命」は継承者たちによって様々な形で反復され、近年のアクター・ネットワーク理論（ANT）にまで至っている。しかし、ANTが捉えようとする文脈と、それが自らを据える理論的文脈からは、「革命の緑化」を試みるキューバ革命の担い手たちの活動を適切に理解することができない。国際NGOの支援のもと彼らが試みる持続可能エコロジー農業の実験は、そのプロジェクト表象において地球規模の課題と個別具体的な成果を直結させ、そのあいだに横たわる「中景」をブラックボックス化することを特徴としている。ANTの理論的視野には、この彼らのブラックボックス化は、自らの活動を「ほんとう」の文脈のうちに把握しようとしないうちに脱文脈化とうつつに違いない。しかし、二次サイバネティクスによるブラックボックスの取り扱いと比較するとき、彼らがその実験において「持続可能性」や「エコロジー」という捉えがたい事象を、むしろブラックボックスを作ることで取り組み可能なものに変えていることが理解できる。「中景」のブラックボックス化は、ポスト・ユートピアの時代を生きる彼らが取り組みの文脈を括りだすために要請したものであったと同時に、個別を普遍へと接続する彼らの作法に不可欠なものだった。それは、「彼ら」と「私たち」のあいだの距離を設定したうえで、「彼ら」の個別具体から「人間」についての普遍的な理解へ向かおうとするマリノフスキー以降の私たち自身の試みに、特別な示唆を与えている。